

## 二年目を振り返って

作業療法学専攻長

佐 竹 勝

四月に第2期生62名と、新たに3名の教員を加え二年目を迎えた。初年度の専攻運営を反省し、“少しは余裕”という志を立てた。この一年を振り返り印象深かった項目を記して稿の役割としたい。

開学二年目である。昨年の倍近い学生が新たに加わり学内は一気に賑やかとなり、活気に満ちた前期の始まりであった。教員にとって一番の心配は、新しく入ってきた学生がこの大学の教育環境に適応してくれるかどうかにある。高校を卒業してやれやれと思う間もなく、朝から隙間のないカリキュラムに追われるため、中には不適應状態になる学生が出てきても不思議ではない。ましてやゆとり教育の恩恵にどっぷりと浸ってきた彼らには、適應よりもまずは順応を願うのだが…。不安は的中し5、6月頃から欠席が目立つ学生が出始め、前期末時点で数名の学生が休学する事態となった。問題の把握が後手に廻ったため気付いた時点ではどうにもならない状態に陥っていたというのが実情である。明確なモチベーションを抱いて入学してくる専門学校と違うためか、その行動には戸惑わされることが多すぎる。つくづく教育の難しさを思い知らされた年であった。大学教育という視点に立ち、反省すると共に、二度と同じ轍を踏まないようにしなければならない。

さて、当大学が持つ他校にはない園芸療法科目（3専攻共通選択科目）であるが、定員枠50名のところに作業療法学専攻から60名、昨年の積み残し数名を含めST、PT専攻から21名、計81名の受講希望があり、昨年に引き続き人気の講座となった。担当していただく外来講師にはご無理をお願いして週2回の講義・実習を無事消化出来た。第一イネーブル、第二イネーブルガーデンが大いに役立つ結果となり、昨年実習ガーデン不足のため受講できなかった学生の単位確保が保証され、一安心したところである。また昨年実現した海外研修は、今年も計画したものの学生からの希望が無かったため見送ることとした。興味関心を示す学生は多いのだがネックは経済的負担が多すぎることにある。経済的支援策にはどうしても限界があるため、プラスして何らかの付加価値的なものを付けたほうがより魅力になるのではとも考えている。例えば、実習を兼ねた研修を経験させることで本学での園芸療法実習の単位を認定し、後期の時間帯にゆとりをもたせるというのはどうだろうか？。いずれにせよ学生が参加しやすい魅力あるプログラム作りとその実現に向けた具体策の検討が欠かせない。

臨床面では老人保健施設“希望が丘”の入所者さん、“水間病院”の患者さんによる園芸療法がスタートした。時期を同じくして、当大学作業療法専攻が主体となって準備を進めていた近隣在住高齢者を対象とした“健康教室”もスタートした。この講座でも数回ではあるが参加者によるイネーブルガーデン散策活動が行われている。このように今や、大学教育、老人保健施設、医療施設、地域プログラムと、4つのグループが思い思いにイネーブルガーデンを利用するようになったことは大変喜ばしいことである。近い将来には、それぞれのグループがお互いを意識することなく、園芸活動を共有し、地域交流の場となることが夢であり目標でもある。必ず実現することを願ってメとする。